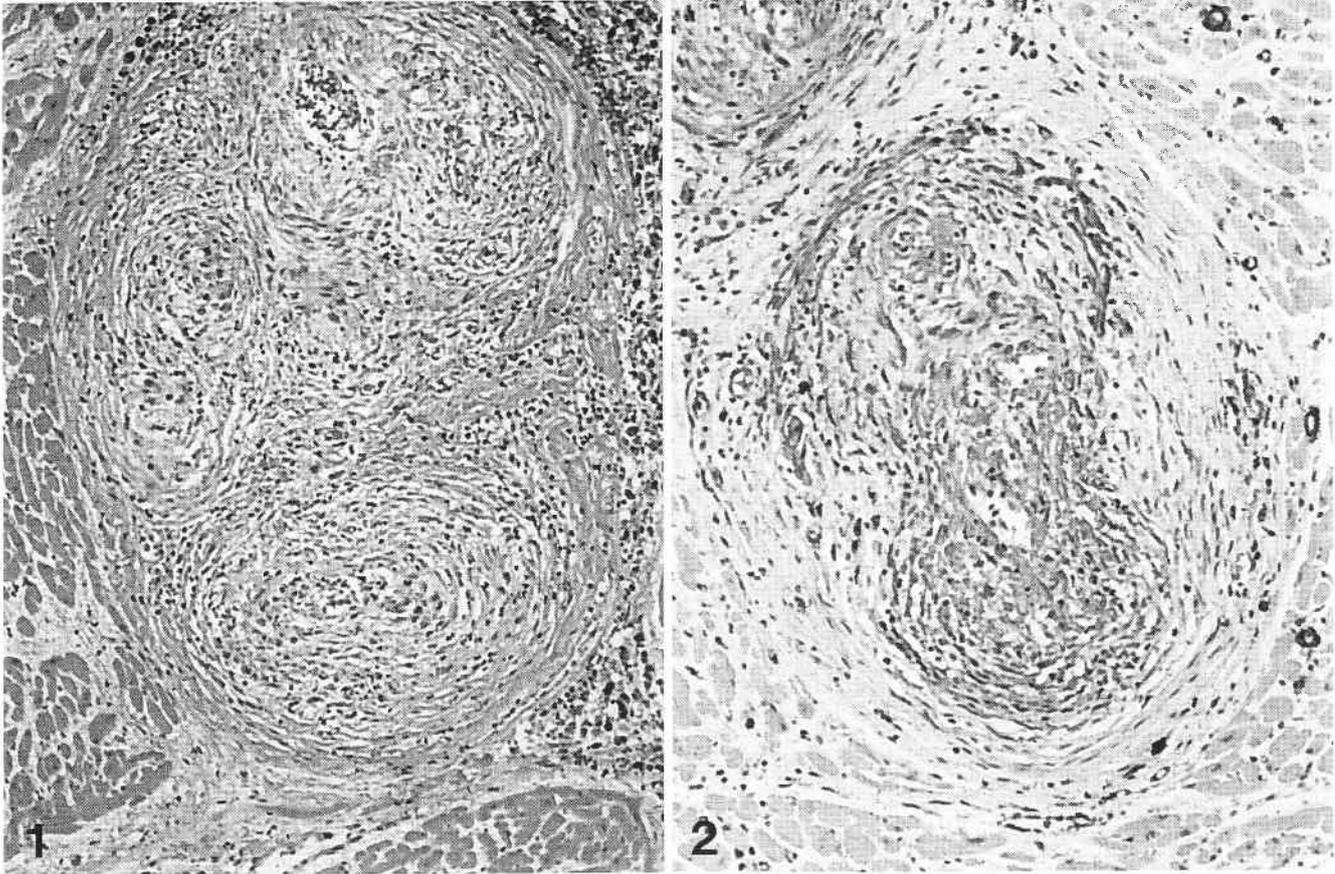


牛の心臓

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第40回獣医病理学研修会標本 No. 772



動物：牛，黒毛和種，雌，5歳，体重367kg。
 臨床事項：1996年10月頃より失神が繰り返しみられ，発作頻度が増加してきたとのことで，翌年8月に本学家畜病院に来院した。削瘦が著明で，失神発作の他に知覚減退，歩様蹠跟などの神経症状が認められた。血液検査では好酸球増多(30~50%)，グロブリン増多，低アルブミン血症などを示し，その後症状の改善はなく，同年11月19日早朝に斃死し，剖検された。

肉眼所見：心臓，肝臓，腎臓，膀胱，子宮などをはじめとして，ほぼ全身諸臓器における小血管壁の肥厚・明瞭化が多発性に認められた。その他，心膜水の増量および右心拡張，うっ血性肺水腫，慢性子宮内膜炎などがみられた。

組織所見：ほぼ全身の小・細動脈における結節性病変が多発性に認められた。このような結節性病変は血管内腔を中心に紡錘形細胞および膠原線維の同心円状増殖により構成され，内弾性板は断裂・消失し，周囲にはリンパ球，形質細胞，好酸球の浸潤がみられた(写真1)。また，一部の血管では内膜が高度に肥厚しているもの，あるいは血管内腔が閉塞してい

るものも認められた。ABC法では，血管周囲に増殖している紡錘形細胞が α SMAに陽性(写真2)，ビメンチンに弱陽性を示した。骨髄では，核が分葉していない後骨髄性好酸球が多数認められた。中枢神経系においては結節性の血管病変はみられなかったが，大脳脚の一部において陳旧性の出血巣と思われるヘモジデリンの沈着を伴う線維性グリオーシスが認められた。比較的大きな動脈あるいは静脈，リンパ管などに血管病変は認められなかった。

診断および考察：以上の所見より，「小・細動脈における筋線維芽細胞の増殖を特徴とする結節性多発性動脈炎」と診断された。本症例の特徴病変は，主に小・細動脈における筋線維芽細胞および膠原線維の増殖と考えられ，従来報告されているフィブリノイド変性を特徴とする結節性多発性動脈炎とは異なり，これらの病変が結節性多発性動脈炎における器質化・癒痕期の病変と一致するのかがどうか注目された。今回はアレルギーの関与も含め，原因学的な検索は行えなかったが，失神発作の原因としては一過性の虚血が原因ではないかと考えられた。